北野が誇る人間になりなさい

山岳ガイド　野村良太（125 期）

▲北海道縦断56日目、残照のテント場。日高山脈神威岳にて。

入学式での校長先生の挨拶を今でも覚えている。

「北野を誇る人間ではなく、北野が誇る人間になりなさい」

伝統ある名門高校として知られているからこそ、浮足立った新入生に相応しい言葉だった。中学までは文武両道だと自負していたのが、高校に入ると周りのレベルの高さに打ちのめされる。多くの北野生に共通の悩みだろう。定期テスト前は決まって硬式野球部の練習が休みになる。放課後のグラウンドで一緒に遊んでいたはずのあいつが、なぜ僕よりもずいぶんと数学の点数が高いのか。いわゆるガリ勉のようには見えないからこそ、その差が大きく感じられた。思えばそのころから、アカデミックな方向に進むのは向いていないかもしれない、という意識があったのだろう。

北海道大学への進学はその象徴だった。同期の上位層のように京大や阪大へ進学するには学力が及ばなかったが、親元を遠く離れた“異国の地“へ行けば何か新しい扉を開けるのではないかと淡い期待を抱いていた。フィールドワークであれば楽しいかもしれない、そう思って水産学部へ進んだが、ワンダーフォーゲル部と出会い登山の魅力に取りつかれた。北海道の大自然に溶け込むと、小中高と続けてきた野球にはない充実感を味わえるのだ。水産学部卒を公言するのが憚られるほどに、海の研究もそっちのけで山へ通った。そのうちに山を生涯の趣味と仕事にしたいと思い、就職活動をせずに卒業とともに山岳ガイドの道に進んだ。

コロナ禍で仕事が無かったのにかこつけて、ずっと温めていた北海道分水嶺縦断という２ケ月越えの長大な登山を実行、完遂した。1 年前の盛大な失敗を踏まえて計画を練り直しての再挑戦だった。史上初の達成の様子をＮＨＫ地上波で年末年始の特番にしていただいたこともあってか、なんと日本人冒険家最高の栄誉と言われる「植村直己冒険賞」を史上２番目の若さで受賞するまでに至った。とにかく夢中で山に登っていただけだったのでこんな賞に辿り着くとは想像もしない、まして北野の記念誌に寄稿することになるなどとは…。

若輩者ながらつくづく人生は何があるか分からない、と思う。10 年前、18 歳当時の自分の想像の遥か斜め上にいる。冒頭の言葉は、目指そうとしてなれるものではない。没頭できる物事にとことん向き合った結果、辿り着くことが出来るかもしれない境地だ。

没頭したいと思う登山に出会ったことがなによりの幸運だ。一方で、言うまでもなく志半ばだ。これからもやりたいことにとことん向き合い、山を登るように一歩ずつ地道に精進していければと思う。10 年後、さらに斜め上に辿り着いていたらきっとその人生は面白い。

1994年豊中市生まれ。日本山岳ガイド協会認定登山ガイドステージⅡ・スキーガイドステージⅠ。札幌市在住。北海道大学ワンダーフォーゲル部で登山を始め、同部62代主将。2019年２～３月「史上初単独知床・日高全山縦走」で令和元年度「北大えるむ賞」受賞。2020年卒業。2022年２～４月、積雪期単独北海道分水嶺縦断（宗谷岬～襟裳岬670km）を63日間で史上初の達成。NHK総合「白銀の大縦走～北海道分水嶺ルート670キロ～」全国放送。同年の「日本山岳・スポーツクライミング協会山岳奨励賞」「第27回植村直己冒険賞」受賞。